

## 日本から雪がなくなる日？

安成哲三

(筑波大学地球科学系)

先日、富山で、「地球温暖化で日本海側の雪はどうか？」という趣旨の講演を依頼され、躊躇しつつも、私なりの見方考え方を披露させていただいた。今年出版されたIPCC報告では、2100年には、最悪のシナリオでは二酸化炭素濃度は現在の3倍近い1000ppm前後、全球年平均気温が現在より5-7℃も高くなるという推定を出している。もしこんな地球になったとしたら、これはもう、恐竜が闊歩した中生代の白亜紀・ジュラ紀の気温に匹敵することになる。当然、地球上の雪氷圏は大きく縮小するであろう。そうでなくともぎりぎりの条件で積もっている日本海側の雪は、気温の上昇と寒気団の弱まりによる降水の減少で、一部の山岳地域をのぞいて、皆無になる可能性が高い。IPCCシナリオにもとづく農水省農業環境技術研究所のグループの予測も、そのような結果を出している。日本海側の雪は最終氷期以降の日本の自然と日本人の文化を培った重要な要素である。

水資源、生態系、農業とそれらがからんだ文化と日本の「持続的発展」は、大なり小なり雪が降る(積もる)ということ为前提としている。したがって、「雪がなくなってかえって住みやすくなる」的な見方は、いかがなものか。ざっとこんな話であった。聴衆の反応はさまざまであったが、富山が「雪国」でなくなりつつあることに対し、多くの人たちは懸念と不安を隠しきれない様子であった。私たちの主食である米の自給を何とか維持している「こめどころ」の稲作の基盤は豊富な雪とその解け水である。とすると、日本は「地球温暖化」で真っ先に、その生存の基盤を失う国ではないか。これが杞憂であることを祈りたい。